



# Pure 純 No.203 Pacific パ May.2019

純パの会会報『純パ』第203号

2019年5月18日発行 / 発行:純パの会

## イチローの引退

影山 一義

3月21日、イチローの日本での最後の打席を、テレビで見えた。正直ところ「やはりこれで現役最後の打席になるのだろうな」と見ていて思った。普段あまりメジャーリーグに関心の薄い私でも、ここ数年、イチローの衰えが目に見えて目立つようになってきたこと。そして、今回の日本でのオープニング・ゲームが、まさに引退試合になるのではという予感。残念ながら的中してしまった。

と同時に、オリックス・ブルーウェーブの時代に活き活きと躍動していたイチローの活躍を見ることができたことを、パ・リーグファンとして、とてもありがたく思ってもいたのであった。

特段、ブルーウェーブのファンではなかった私にとって、最初に彼に注目することになったのは、入団3年目の1994年の開幕前に登録名を本名の「鈴木一朗」から「イチロー」に変更したとき。でも、日本人選手として初めて名前での選手登録となった「イチロー」よりも、同じく本名から「パンチ」に登録名を変え、そのキャラクターから実力以上に人気のあった(失礼!)佐藤和弘の方に目がいったのを記憶している。

しかし、その後には、イチローが自らの実力で、プロ野球の様々な記録を塗り替えていくのを目の当たりにすることになる。プロ野球史上初となるシーズン2000安打、当時のパ・リーグ最高記録となる打率・385での首位打者、優勝チームでなかったにも関わらずシーズンMVPの獲得など、一躍その名前がプロ野球の世界だけでなく日本中に広まっていくのを目の当たりにすることになる。

翌1995年、阪神・淡路大震災に見舞われた神戸の地で、まさに震災からの復興のシンボルとして、リーグ優勝に大きく貢献。個人タイトルでも首位打者・打点王・盗塁王・最多安打・最高出塁率の「打者五冠王」。本塁打もこの年28本で本塁打王を獲得した小久保裕紀とは3本差の25本放ち、打撃タイトルを独占する可能性すらあった。

そして、イチローの実力は打撃面だけでなく、外野から矢のような速さと正確なコントロールで「レーザービーム」と呼ばれた強肩ぶり。そして走塁の技術。「走攻守」三拍子そろった選手は、特にパ・リーグではこれまで幾人も見ることがあったが、それまでの選手たちとはスケールの違った、そして完璧なプロ野球選手を、初めて目の当たりにしたように思っていた。正直、あまりに完璧すぎて、むしろ近寄り難かったようにも感じていたことさえあったぐらいでもある。

しかし、日本で9年間プレーした後、アメリカへ渡る。メジャーリーグでも数々の記録を塗り替え、気がつくともメジャーリーグ19年間で3089本の安打、日米通算では4367本の安打を記録。またワールド・ベースボール・クラシックの第1回、第2回の日本の連覇にも貢献したのも記憶に残る。

でも、私が強く目に焼き付けているのは、ブルーウェーブのユニフォームを身にまとい、グリーンスタジアム神戸のグラウンドを縦横無尽に駆け回って、日本のプロ野球に革命を起こしていった様子をまさにリアルタイムで目撃できたことを、ささやかだけど、パ・リーグファンとして、うれしく思う。